

福嶋敬宜先生編集による『診療・研究に活かす病理診断学—消化管・肝胆膵編』が医学書院から上梓された。B5版の272頁からなる病理診断学の解説書である。

「明日から“病理に強い臨床医”と呼ばれるようになる」、そして「臨床医と病理医を強力につなぐ一冊。これで自信をもって患者さんに説明できる!」さらに「これで学会・研究会が楽しくなる!!」と帯には謳われている。医学書院の発刊にはずいぶんとノリがいいなあと思いながらページを開いてみた。実は……今、いつでも鞆に入れて持ち歩いている一冊になっている。

著者は、「病理学の教科書ではなく、病院で他の臨床医とともに働く病理診断医の視点から書かれた病理診断学についての解説書」と記しているが、実際の構成を紹介しよう。本書は入門編、基礎編、応用編、資料編に分かれている。入門編では病理診断を概観したうえで、病理・細胞診検査の依頼のしかた、そして病理・細胞診レポートの意味するところがわかりやすく解説されている。基礎編では臨床医として知っていれば得する臓器・病変別の病理学的アプローチや特殊染色の基礎知識が、あまねく記載されている。これは読み応えがある。さらに応用編では病理診断を研究に活かす手法や学会発表・論文投稿に役立つ病理写真の見せ方まで伝授してくれている。これだけでも十分なのに、いつでも参照できる資料編として「病理診断関連用語125」や「正常組織像アトラス」まで用意されている。用語の定義や正常組織の基本像を、折に触れ確認するのにとても便利だ。

コラムの内容も優れものである。「ここがホット」では、NASH/PanIN/MUC/SSBE/MALTなど、最近の消化器病関連のキーワードの解説が随所に配され、なるほどと合点のいく明快な説明がなされている。「Coffee Break」,「FAQ」,「耳より」も読んでいて実におもしろい。

「病理診断学では肉眼所見を十分に観察し、次に組織所見に入っていくのが基本である。しかも多くの病態はHE染色のみで診断可能であり、特殊染色が必要となるのはむしろ少数例である」と述べられている。これは画像診断の思考過程に通じるもの

がある。われわれは画像に表現される病変の存在部位や形状から鑑別を絞り、そして画像上の微妙な濃淡から組織所見を類推していく。造影検査を追加し血流情報を得るのは、特殊染色で鑑別を絞り込んでいく組織診断の過程に相当しようか。

また、病理診断でも依頼する前にもう少し情報を伝えてくれるか直接相談をしてくれれば、より適切な検査法を選ぶことで回り道をしないですむことがあるとも著者は記している。同じ思いをしばしば経験する画像診断医の一人として、我が意を得たりである。いたるところに登場する「側注」もぜひ目を通していただきたい。そこに込められた病理診断医の本音やつぶやきも見逃せない。病理診断学が語られているが、画像診断学へのヒントが満載されている。

本書の特徴は、著者の狙いが込められた「はじめに」に余すことなく記されている。ぜひ、最初に「はじめに」を一読していただきたい。そのなかで、本書は主に消化器系の診療と研究に携わる臨床医に向けて書かれたものだが、著者は読者として、

- ・病理研修を受ける臨床研修医
- ・消化器系の専門医をめざしている人
- ・臨床病理カンファレンスでの病理医の説明にピンとこないことが多い人
- ・中堅の外科医でありながら病理検体の扱いなどの指導に自信がない人
- ・自分の病院の病理医とほとんど話をしたことがない人

をターゲットにしていると述べている。さらに、病理検査に携わる臨床検査技師、一般病理医、そして臨床実習中の医学生など、実践的な消化器病理診断学の知識や手順などを短時間に習得したい人達にも最適としている。

本書の多彩な内容と気配りの効いた構成は実にユニークで実践的だ。専門が異なれば十人十色の利用法があるに違いないが、本書はどの方にも十分満足のいくものと確信する。ぜひ手にとって本書を開いてみて欲しい。病理診断学の新しい世界との遭遇が待っている。

(B5判 272頁 定価6,825円(本体6,500円+税5%))
2004年 医学書院 刊